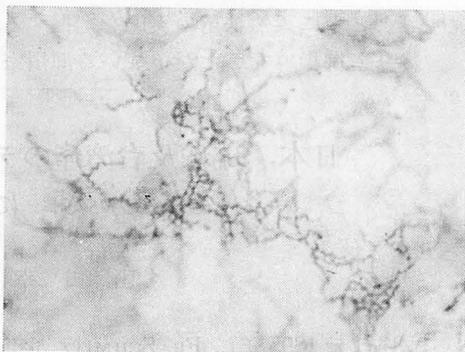


石灰藻に穿孔するコンコセリス

右田 清治*

アマノリ類の果胞子が貝殻等の動物の殻や大理石の様な石灰岩に穿孔して糸状体になることはすでに知られている。筆者はこの春、ヒライボ (*Lithophyllum okamurai*), ウミサビ (*L. yendoi*), *Goniolithon* sp. 等の石灰藻の乾燥枯死した基質に、アサクサノリ, マルバアマノリの果胞子を付けたところ、穿孔して糸状体になるのを認めたので短報する。

石灰藻基質の表面は細胞痕のため多角形の穴になつていて蜂窩状をしている。果胞子は発芽後しばらく表面を匍匐する場合もあるが、多くは直ちに穿孔し、穴を囲む石灰壁に沿つて伸長する。このため糸状体は直線的に伸長せず、原則的には放射状をなすが形は極めて不規則である。また糸状体は小刻に屈曲して分枝も貝殻の場合の様に對生するものは少ない (写真参照)。



石灰藻に穿孔した
アサクサノリの糸状体 ×140

また石灰藻の切断面に果胞子付けをすると、格子状の石灰壁の排列通りに各枝は殆んど直角に屈折して、糸状体は網の目の様な形になる。この様に顕微鏡的な石灰質部の排列した基質で、石灰質部にのみ沿つて穿孔生長することは、糸状体が石灰質以外の基物上を匍匐するより石灰質に穿孔するのを好む一つの根拠ともなると考えられる。

この糸状体の穿孔生長は対照のカキ殻に比較して初期の生長度測定では遜色は認められなかつた。ただ現在迄の観察では穿孔がカキ殻、大理石等の場合より可なり浅い、これは石灰藻に蓄積している石灰質は光線の透過が少いためと考えられる。培養の際も石灰藻の方はカキ殻より幾らか明るい処で

* 長崎大学水産学部

生長が良好の様である。

光線、乾燥に対する抵抗性は実験の結果、対照のカキ殻と余り差はなく、直射日光下で10分前後、室内乾燥(湿度75%)で40分位で枯死する。

一方、6月中旬に有明海の島原市猛島海岸で平均干潮線附近の枯死石灰藻を採集して糸状体の穿孔を検鏡調査した。天然の石灰藻基質には貝殻同様に色々の穿孔生物が見られる上に、貝殻と違つて糸状体の放射状の輪郭や特徴ある分枝が見難いので識別が困難であるが、撰択的に採集したものの約14%で、アマノリの糸状体と思われるものを観察した。

石灰藻の被覆はやや外洋性の内湾では、貝殻よりはるかに多いと推定され、そのうち枯死しているものも少ないと思われる。胞子の形成や放出等の観察が必要であるが、石灰藻基質に果胞子が穿孔生長することは興味深い。またこのことは今後海に於ける石灰質以外の基物に附着した果胞子の帰趨の究明等とともに天然採苗の実態を把握する参考資料にもなると思う。

終りに御指導をいただいている瀬川宗吉博士に御礼申し上げる。

日本、琉球及台湾産のテングサモドキ屬 (*Gelidiopsis*) に 就 て

山 田 幸 男

本属は元1895年にFR. SCHMITZが東アフリカ産の海藻をしらべた際に *Gelidium pannosum* GRUNOW に相当する種類を精検し、これは *Gelidium* とは構造が全く異なる事を指摘し、それに基いて創設した属であつて、属の Type species としては嘗て Greville が *Gigartina variabilis* GREV. として報じたものを *Gelidiopsis variabilis* (GREV.) SCHM. として明示した (Engler's Bot. Jahrb., 1895, p. 148)。そして同時に MONTAGNE & MILLARDET の *Gelidium scoparium* M. et M. も KÜTZING の *Gelidium repens* KG. も共に此の新属に入れらるべきものとした。其後 VICKERS は KÜTZING の *Acrocarpus gracilis* KG. としたものと及び C. AGARDH の *Sphaerococcus intricatus* AG. とし、又 KÜTZING が *Gelidium intricatum* KG. (Sp. Alg., 1849, p. 767) として記載し、*Acrocarpus intricatus* KG. として図説した (Tab. Phyc. vol. 18, 1868, pl. 35, figs. d-f) ものを何れも本属に移した (Liste